研究論文

日本語を学習する中国大学生に対する日本留学への意識調査
― 南京工業大学を対象に ―

方　　萍・松岡知津子・福岡　昌子

Japanese Language Major Students' Awareness of Studying Abroad
―Take for Example Nanjing University of Technology―

Fang Ping, MATSUOKA Chizuko, FUKUOKA Masako

〈Abstract〉

In recent years, college students tend to think that overseas study experience is beneficial to their future career, and "Study in Japan" has become an important factor in the purpose and meaning of Japanese language study. This study focuses on the students' awareness of studying abroad. The students in focus are Japanese majors Nanjing University of Technology. We conducted questionnaire to them and the results show that they hope to gain degrees in order to have better jobs. We can conclude that ,according to their awareness, the biggest benefit of studying in Japan is to experience better education, and the students believe the experience can lead to their future carriers. Howerer, it seems that Nanjing University of Technology has not responded sufficiently to their students' awareness. Furthermore, we made suggestions about improvement in exchange program.

キーワード：留学　意識調査　短期留学プログラム　就職志向

1．はじめに

1999 年、中国教育部では、2010 年までに大学院生も含め、中国において全国大学統一入学試験（全国普通高等学校招生入学考试）の受験生の進学率が 15%になるよう入学者の募集人数を拡大する政策を打ち出した。そのニーズに応え、中国における高等教育機関では、新しい学部や学科が続々と設立されてきた。その波に乗り、2003 年に南京工業大学では　日本語学科が設けられた。「総合日本語」、「上級日本語」、「聴解」、「汎読」、「会話」、「作文」、「日本事情」、「科学技術日本語」など、様々な日本語コースが開設され、2011 年に至っては大学院生の募集も開始された。中国人教師は 10 名で、全員修士号を取得し、中には海外で学位を取得した教員もいる。現在は、博士コース在学中の教師が全員の半数以上を占めている。日本人教師は当初は年に一名招聘されていたが、2013 年から二名に増員された。2005 年以降、日本の鹿児島大学、名古屋産業大学、三重大学と連携

関係を結び、交換留学プログラムの実施を開始した。院生を含め、年に 5、6 名の選抜学生を派遣し続けている。近年、高等教育機関では海外留学経験が将来の就職にも有利だと思われるので、「日本への留学」が日本語学習の目的や意味を考える上で重要な要因になりつつある。中には、一定期間の海外留学を義務づける大学も現れてきた。国際交流基金による日本語教育機関調査（2012）では、全世界における日本語学習者には、東アジアが占める比率が圧倒的に高く、その内、最も学習者が多い国は中国で 1,046,490 人だという。また、日本学生支援機構（JASSO）の発表によると、2014 年 5 月 1 日現在、184,155 人の留学生が日本の大学等で学んでいるが、その内、中国からの留学生は 94,339 人で、全体の半数近くを占めるという。留学志向が重視されつつある中、学生の留学への意識を明確化する必要があると考えたため、筆者の勤める南京工業大学で日本語専攻の学生を対象として、留学意識に関する事例調査を実施し、日本語学習者の留学意識を分析してみることにする。以下、本稿では、南京工業大学を「本学」と呼ぶ。

2．先行研究

日本の入管法（2009 改定版）によれば、「留学」とは「本邦の大学若しくはこれに準ずる機関、専修学校の専門課程、外国において十二年の学校教育を修了した者に対して本邦の大学に入学するための教育を行う機関、又は高等専門学校において教育を受ける活動」である。本稿で言う「留学」は中国高等教育機関において教育を受ける期間、若しくは修了後海外での高等教育機関へ赴き、異国の教育を受ける行為のことを指す。

留学経験と外国語学習との関連性については、様々な側面から研究がなされている。DeKeyser（1991）、Freed（1993）は、留学経験が学習者の目標言語の習得に何らかの効果をもたらしたと指摘している。さらに、三浦（1983）は生活環境の変化により、外国語の学習動機の強さと種類が容易に変化すると述べている。留学経験は外国語学習のために重要な役割を果たすと言っても過言ではない。

これまで、留学の意識に関してさまざまな観点から考察が行われてきた（船津・堀田（2004）、横田（2009）、土井（2013）、星野（2014））。留学先の決定要因について論じた横田（2009）や学生が抱く留学先のイメージや留学の動機などについて考察した星野（2014）はアンケート調査を実施し、量的に分析考察を行っている。

中には、横田（2009）は、学生が海外に留学する場合、どのような「留学の魅力」を見出し、留学先を決定しているのかを調査している。土井（2013）は、日本語を学習する中国人大学生に焦点を当て、留学先選択に際し重視することなどを調査した。その結果、中国人大学生は「高度な学問や技術」を「質の高い」教育機関で学び、「就職」に役立てた

いと考えていることが明らかになったと述べている。また、星野（2014）は名古屋大学の大学生の留学態度に関するアンケート調査を実施し、①「留学の動機」②「留学地域ごとのイメージ」③「第一規模の留学生」④「東南アジア留学を選択しない理由」⑤「留学先を決定する最重要素」⑥「東南アジア留学するとしたらどこの国か」という面から質問を設定し考察した。

中国学生を対象に行われたのは横田（2009）と土居（2013）、いずれも留学に際しての決定的な要因などの分析により日本側の留学生の受け入れ策を改善しようとしている。しかしながら、中国の教育者の立場からの調査研究はまだ見られない。また、いかに学生の留学意識を高等教育機関の実態と結び付けるかという研究もほとんどされていないようである。本研究では、事例研究として中国における日本語を専攻とする学生を対象に、日本留学への意識を調査し、これからの日本語留学向けの対策、即ち、「留学する際の不安を少しでも軽減したい」と考えている学習者の期待に応えられるような改善策を再考し、中国教育実施者の立場からの助言をしたい。

3．調査概要

次にアンケート調査の調査項目や調査内容について述べる。本調査は、中国の日本語専攻学生を対象に、どのような留学意識を持っているか、またそれに合わせてどのような教育を行うことが適切か、さらにそのニーズに応じた留学環境が整っているかを明らかにすることを目的とする。質問は学習者の属性、留学意思の有無や理由や目的、留学のメリットとデメリットといった 13 の設問を用意した。

4．調査結果

(1) 調査協力者の属性

表 1　調査協力者の属性

調査協力者	一年生	二年生	三年生	四年生
人　　数	19 人*	25 人	18 人*	21 人*
学習時間	7 か月	1 年 7 か月	2 年 7 か月	3 年 7 か月

＊高校や中学校から勉強しはじめた学生を含む。

(2) 日本語学習のきっかけ

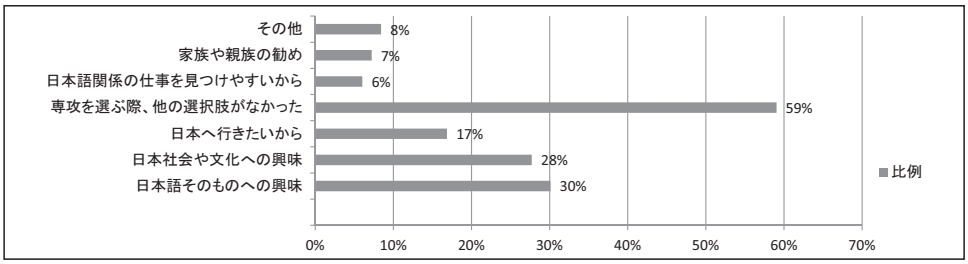

図 1　日本語学習のきっかけ

図 1 の通り、「専攻を選ぶ際に、他の選択肢がなかった」（59%）が最も多かった。南京工業大学では、第一希望不合格だった学生は実際の希望ではない専攻を選ばざるを得ないという消極的な学習態度が窺える。次いでは「日本語そのものへの興味」、「日本社会や文化への興味」で、30%と 28%であった。

(3)「学習者の日本語の学習意欲」について

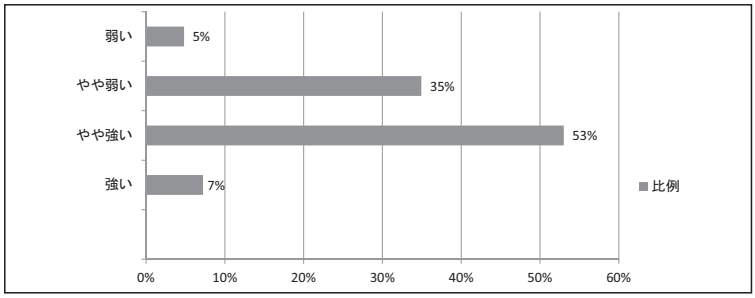

図 2　日本語の学習意欲

図 2 に示されるように、一番多く挙げたのは「やや強い」（53%）、次いでは「やや弱い」（35%）であった。「やや強い」と「強い」の比率を合わせて半分以上を超えている。中国では、日本語を専攻とする以上は、日本語を学びたいと思う気持ちが強いことが窺える。

(4)「卒業後の進路希望」

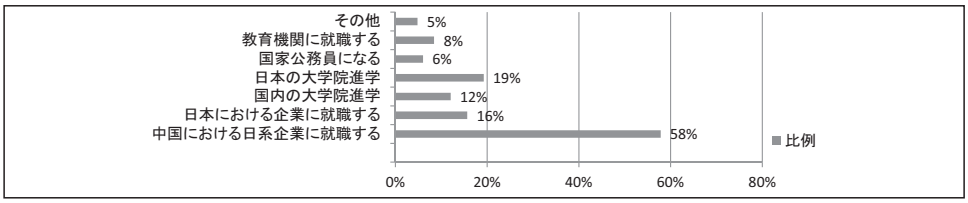

図 3　卒業後の進路希望

上位に挙げられたのは「中国における日系企業の就職」で、58%であった。次いでは、「日本の大学院への進学」(19%)「日本における企業に就職する」(19%) であった。「その他」は「マスコミ関連職に就きたい」(5%) との回答があった。進学より就職のほうが圧倒的な比重を占めていて、進学を希望する学生が多い傾向が見られる。

(5)「留学経験の有無」

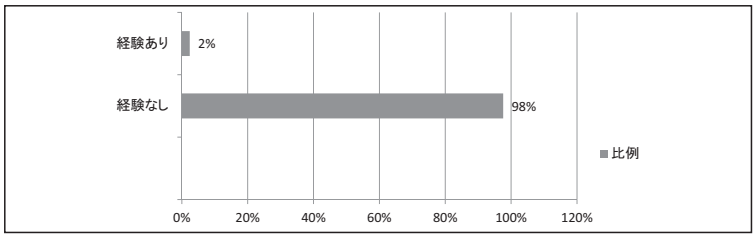

図 4　留学経験の有無

図 4 から、ほとんど留学経験がないことがわかる。

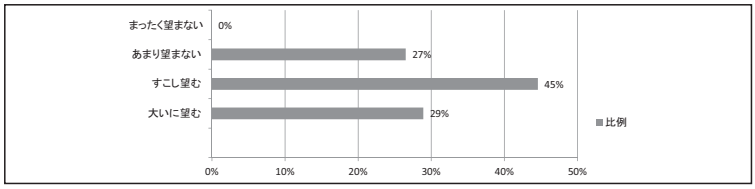

図 5　留学意欲

(6)「留学意欲」

これに関して、「多く望む」と「少し望む」の回答数を合わせて 74%で、「あまり望まない」の 27%名を大幅に上回った。「まったく望まない」の比率の低さから、多くの学生たちは日本語を専門とした以上、いつか日本へ行ってみたいと考えていることが窺われる。

6－1 の「留学を希望しない理由」について[1]

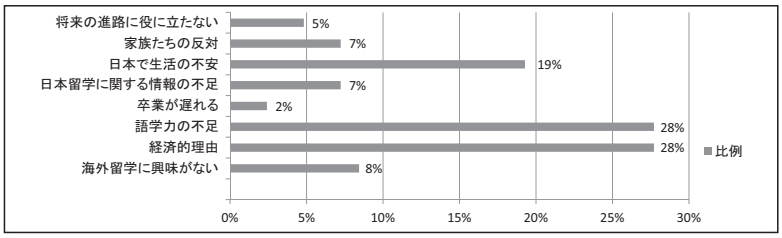

図 6　留学を希望しない理由

「留学を希望しない理由」について質問したところ、図 6 のように「経済的理由」や「語学力の不足」がそれぞれ 28%であった。次いで、「日本での生活の不安」（19%）、「海外留学に興味がない」（8%）「日本留学に関する情報の不足」（7%）「家族たちの反対」（7%）「将来の進路に役に立たない」（5%）「卒業が遅れる」（2%）という回答であった。

本学では、先に述べたように、日本の 3 つの大学と協定を結んでおり、半年もしくは 1 年間の短期留学生制度がある。この短期留学制度について知っているかどうかを質問したところ、回答者 44 名のうち 22 名が「知っている」、22 名が「聞いたことはあるが、詳しく分からない」と答えた。程度の違いがあるものの、回答者全員が知っているということがわかった。さらに「短期留学制度をよく知っていたとしたら、留学するか」という質問に対し、25 名が「いいえ」、19 名が「はい」と答えた。つまり、留学を希望する学生が少ない一つの理由は、海外留学や留学制度に関する情報不足ではないかと考えられる。

(7)「留学目的」について

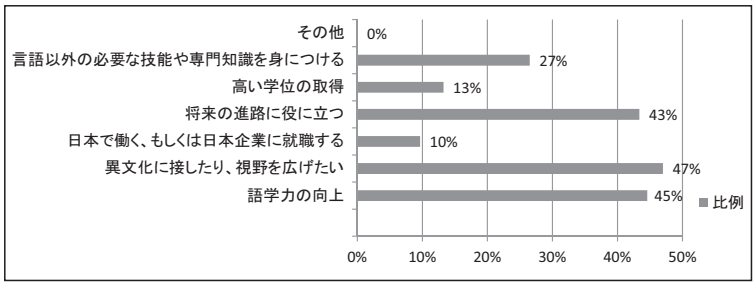

図 7　留学目的

質問 7 以下の項目は留学希望のある学生にだけ答えさせるものである。「留学の目的」に関して、図 7 のように「異文化に接したり、視野を広げたりしたい」を選んだのは一番多く、47%であった。次いで「語学力を向上させる」と「将来の進路に役に立つ」という理由で挙げた学生はそれぞれ 45%と 43%である。それ以外、「技能や専門知識を身に付け

る」（27%）、「高学位の取得」（13%）、「日本における就職」（10%）と多岐にわたっている。

(8)「日本の留学先としての魅力」について

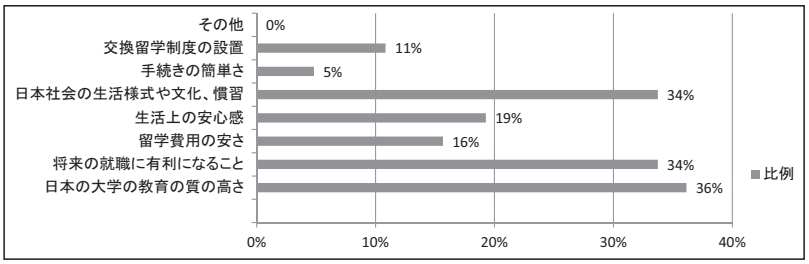

図 8　日本の留学先としての魅力

日本の留学先としての魅力を質問した結果、「日本の大学の教育の質の高さ」が高く評価されている人は 36%であった。それに次いで、「将来の就職に有利になること」（34%）、「日本社会の生活様式や文化、慣習」（34%）、「生活上の安心感」（19%）、「留学費用の安さ」（16%）、「交換留学制度の設置」（11%）、「手続きの簡単さ」（5%）であった。

(9) 留学の滞在期間

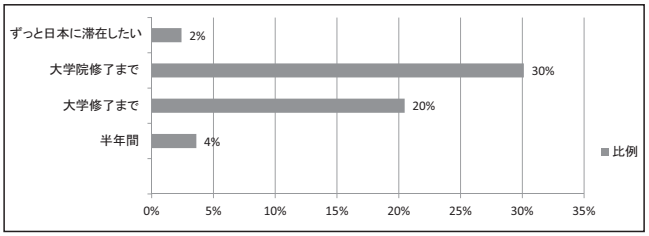

図 9　希望留学滞在期間

希望留学滞在期間について、30%の学生が「大学院修了まで」を挙げ、上述の質問 8 の結果とあわせて考えると、日本の高等教育機関へ入り、質のいい教育を受けたいという要望が伺える。

（10）留学における心配事

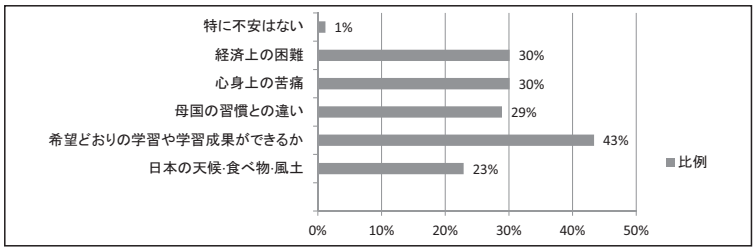

図 10　留学における心配事

心配事について、トップに占めているのは「希望通りの学習ができるか、学習成果があげられるかどうか」（43%）、その他、「心身問題」（30%）、「経済的な困難」（30%）、「日常生活における母国の習慣（生活習慣、宗教上の習慣等）との違い」（29%）、「日本の天候や食べ物、習慣に適応できるかどうか」（23%）であった。「特に不安はない」は僅か 1%に過ぎない。中国では、一人っ子政策が実施されてきた中で、ほしいものがあれば何でもすぐ手に入るような経済上何の困難にも直面していない学生にとっては、家族のもとを離れ、知らない土地での生活することへの不安が大きく、外国への留学に関して心細く思っていることが垣間見える。

（11）留学に際しての望むこと

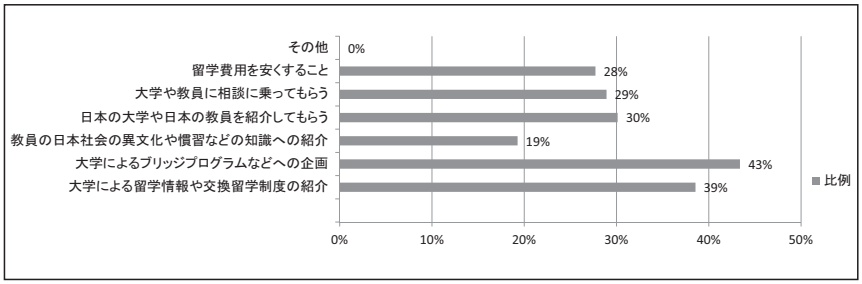

図 11　留学に際しての望むこと

これについては、一番多く挙げられたのは「大学によるブリッジプログラムなどへの企画」（43%）、次いでは、「大学による留学情報や交換留学制度の紹介」（39%）、「日本の大学や日本の先生たちを紹介してもらう」（30%）、「留学費用を安くすること」（28%）、「教員の日本社会の異文化や慣習などの知識への紹介」（19%）という結果であった。

(12) 留学に際してのプラスの要因

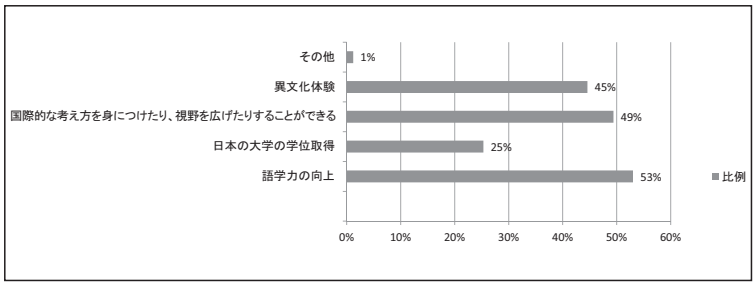

図 12　留学に際してのプラスの要因

留学に際してのプラスの要因に関しては、上位に選ばれたのは「語学力の向上」(53%)、国内より海外留学のほうが語学力の上達に役に立てると考えられる。「国際的な考え方を身に付けたり、視野を広げたりすることができること」(49%)、「異文化体験」(45%)、「学位取得」(25%) の順であった。

(13) 留学に際してのマイナスの要因

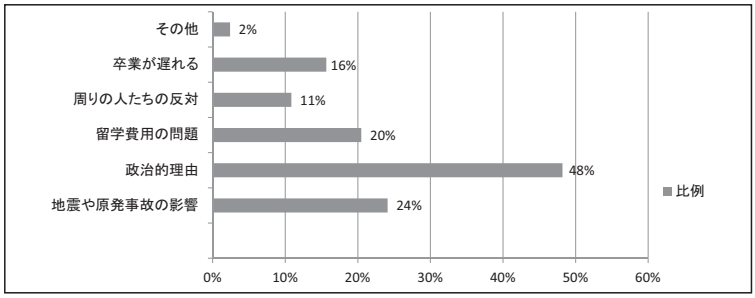

図 13　留学に際してのマイナスの要因

留学に際してマイナスの要因については、回答者数の 48%は「政治上の不安定」を挙げている。日中関係に懸念を抱いていることが分かった。次いでは「地震や原発事故の影響」(24%)、「留学費用の問題」(20%) との回答が多い。2011 年の日本大震災と福島原発事故により、留学先の安全上の問題を重視する学生が多い。「政治的理由」、「安全上の問題」、「経済的問題」が順に挙げられた。経済的な理由より中日政治関係や安全上の問題を懸念していることが窺える。その他、「卒業が遅れること」を挙げたのは 16%、それは中日のアカデミック・イヤーの違いにより、卒業論文の提出を遅らせ、通常の卒業時期が遅れてしまうからと考えられる。「その他」は「機会が少ない」(2%) との回答があった。

5．考察と今後の課題

本研究は南京工業大学における日本語専攻学生の留学意識を把握する目的でアンケート調査を実施した。以下アンケート調査から得られたデータをもとに分析した結果をもとに考察を述べたい。

1）質問 4 の卒業後の進路については、「中国における日系企業の就職」と「日本における企業に就職する」を合わせて 74％となり、「進学」より「就職」の志向が見られた。中国の大卒の就職が厳しくなっている中で、早いうちに就職したいと思っており、また外国語を専攻した学生のうち、女子学生は大半数を占めており、進学より就職し家庭を築きたいという要望が伺える。また、質問 7 の留学目的の回答にトップに挙げられた「異文化に接したり視野を広げたりすること」、「語学力の向上」、「将来の進路に役に立つ」も日本語専攻生の将来の就職に結び付けたいという希望が見られる。

2）さらに質問 8 日本の留学先としての一番の「魅力」については、学生は質の高い教育機関で学びたい、将来の進路に役立てたいということが分かる。この結果も土井（2013）の「中国人学生の「高度な学問や技術」を「質の高い」教育機関で学び、「就職」に役立てたいと考えている」の調査結果と一致している。また、同じく 2 位に挙げられたのは「日本社会の生活様式や文化、慣習」（34％）であった。日本語専攻生は、日本語だけではなく、日本の社会、文化、経済などを勉強することにより、将来の就職に生かせることを期待していることがわかる。日本のポップカルチャーが中国でも浸透していることなどの影響や就職に有利な文化の魅力も関心を寄せられている原因だと言える。一方、「交換留学制度の設置」は 11％に止まり、あまり評価されないこともわかる。質問 10 の「留学際の心配事」の上位に選ばれた「希望どおりの学習ができるか、また、学習の成果をあげられるかどうか」は中国学生の学業重視志向が窺える。

3）一方、質問 6 の 74％の回答率からわかるように、大半の日本語専攻学生は、日本への留学に関心を示しているものと思われる。日本語を生かして将来の就職に結びつけるために、日本語の上達への期待が大きいと見られる。質問 11 は留学際の期待について聞いたところ、「大学によるブリッジプログラムなどへの計画」（43％）がトップで、それと比べ、他の選択肢の比率はさほど大差がない。「大学によるブリッジプログラムの企画」「大学による留学情報や交換留学制度の紹介」「日本の大学や日本の教員の紹介」「大学や教員に相談に乗ってもらう」、どれも本学への要望が大きいということは留学できるような国内環境整備がまだ整っていないと言える。

上記の考察に示されたように、日本語専攻の学生は比較的に就職という実利的な目的を持っており、それを留学動機に今後日本への留学の可能性が高いと予想できる。それに、

日本への留学に関心が多数寄せられているにもかかわらず、留学できるような環境作りがまだ整っていないということが分かった。その現状に対して、どのような改善策を提供すべきか、さらに今度の調査をきっかけに従来の教育内容を問い直す必要があると考えるので、次の二点について述べる。

（一）既存留学プログラムの改善策

既存交換留学プログラム[2]は今まで、本学の国際合作交流学院により留学に関する情報の通知、学生募集・選抜、関連手続きが行われていた。「どのような経緯で留学したのか」を当時の交換留学生に聞いたところ、一年間、日本の大学へ留学できるから、奮って申込むよう教員から勧められただけだったという。「その日本の大学はどんな大学か」、「奨学金はどうなっているか」、「宿泊施設はどうなるか」、何の情報も分からない状況で申請し、留学したとの回答を得た。その学生の話をそのまま引用すると、「稀里糊涂」（ぼんやりしているうちに）もう日本の土地へ行ってしまった。それは担当の事務係が日本語が分からないので、交換留学制度の内容を詳しく説明できず、学生が留学に関する情報を十分に把握していなかったことが察知できる。従って、あらゆる手段で留学に関する情報発信を積極的に行うか、周知方法を工夫する必要がある。交換留学プログラムの説明会は学部内において行ったりするなど、交換留学ガイダンスの配布や日本の各協定校との留学に関する学校情報、現地情報、安全情報、奨学金、査証手続きといった情報を本学の日本語学部のホームページによる公知なども検討していきたい。また、留学先の事情を知る手段として、留学経験者による留学体験報告会を実施することも考えられる。そのほか、海外大学で履修した単位交換が容易に行えるような単位認定制度を定める必要もある。

また、グローバリゼーションが進展しつつある世界に適応させるよう、中国の高等教育の現状を踏まえた現実的かつ効果的な留学プログラムの開発が重要だと思われる。現在、日本における夏休みや春休みの短期間に海外研修を実施する「海外総合演習」を実施する大学もある。それは異社会や異文化に触れ、新しい価値観を発見し、グローバルな感覚を醸成できような目的を達成しようとする。その実施内容を参考に、本学でも学生に海外で学ぶ機会を提供できると考える。中国で日本語を学ぶ学生が半年、または夏休みまたは冬休みに海外の協定校に約 2 週間滞在し、語学や現地の文化などを学ぶという講義をうけさせたりするといった夏季・冬季留学プログラムも考えられる。例えば、協定校の三重大学は電車を利用すれば日帰り旅行できる観光名所に恵まれている近畿地方にあるので、日本の伝統社会の雰囲気を感じさせる観光名所を巡る文化体験だけではなく、ホームスティや地元学生との交流などにより、伝統的社会と現代社会の差異も気づかせる役割もあると考えられる。

学生の高い「就職志向」を考慮に入れ、交換留学向けのインターンシップの授業の開設などを組み入れたプログラムを開発していく必要がある。実際に中国における日系企業に入って仕事を体験することにより、日本社会での礼儀やマナーや電話応対など、日本の社会生活や企業文化について学び、今後のキャリア選択にも繋がると思われる。海外大学との連携によるダブルディグリーなどのプログラムの実施に取り組めば、学生の留学に対する志がさらに高まると思われる。

留学のレベル別に考えれば、学部レベルでは、異文化体験を中心に、認定できる単位取得、語学力の向上などを目的とした短期留学プログラムを実施する。大学院を目指す学生のため、大学院予備教育コースを開設したり、大学院のレベルに合わせたアカデミック・ライティング日本語や研究の方法など大学院受験まで徹底指導したりすべきだと考える。

（二）教育内容の再考

次に、本学の日本語教育に求められる課題を考察する。中国では、講義中心の教育が実施されてきた一方で、日本の大学教育では、少人数によるゼミナールを頻繁に行い、レポートや論文を書くことを課すことがある。日本の大学での学習スタイルに適応させるため、大学の特質などを学生に分かってもらう必要がある。日本の大学の特質にあった教育理念のパラダイム転換を促進すべきだと思われる。異文化間教育に関する「日本事情」や「日本社会」「日本文化」など様々な科目名は日本語学科が設立されて以来も実施されているが、日本の歴史、地理、政治、経済、社会などといった様々な分野の知識を教えている。教師の関心は日本の典型的な伝統文化や、歴史、地理など日本事情の知識を深めることにあった。しかしながら、教育現場において、言語や文法の面では極められるが、日本人らしい発想や社会との関連を教育内容に取り入れていないと指摘している。

さらに、グローバリゼーションが進んでいる中、異文化教育によく取り上げられたベネディクトの「恥の文化」、中根千枝の「タテ社会」、加藤周一の「雑種文化論」といった従来の紋切り型の「均質的」文化論は問い直される時代がおとずれてきた。すべての文化は他の文化の影響を受けながら変化する。従って、われわれは従来の静態的な視点から動的な視点に立って、流動的で絶えず変化している日本の社会を見極めるパラダイム転換を促進すべきだと考えている。今後、高等教育機関ではどう教育内容を設けるか、今度の考察の主な目的ではないが、今後「日本事情」教育は「目に見える文化・基礎的知識」[3] から「見えざる文化・行動能力」[4] への展開をはからなければならないと思われる。

最後に、今後の課題について述べて行きたい。今回の調査は立会いをすることができず、メールでアンケート調査を実施した。客観性を保たなかったと考えている。また、今回は、一つの大学に絞って日本語専攻生のデータの調査を分析したが、今後はより広い範囲のア

ンケート調査を分析し、その上で日本語教育に求められるものを突き詰めて考察する必要があると思われる。さらに、南京工業大学は日本の 2 校の大学と連携校の関係にあるが、今後さらなる交換留学プロジェクトの開発の可能性を検討していく必要がある。

注

(1) 今度の調査は南京工業大学の同僚の協力を得て、メールで質問紙を送付し、合計 83 名からのアンケート調査表を回収した。学力の相違や四年生の実習事情などの要素を考慮に入れ、アンケート調査表は中国語を使い、学生に記入してからメールで送ってもらうという形を取った。

(2) 質問 6-1、6-2、6-3 は日本留学を希望しない人だけに質問したものだが、じっくりその要求を読まなかったのか、記入した留学希望のある学生も結構いた。一応参考にもなれると考えたので、敢えてデータを取り入れた。

(3) 現在、本学の交換協定校である日本の三重大学と鹿児島大学では、交換留学プログラムが実施されている。交換留学プログラムとは、単位の互換を目的とし、海外の派遣先の履修単位は自分の大学により認定され、さらに、本学学費を納入すれば、交換留学先の大学の授業料は免除されたり、奨学金をもらえたりするなど一定の協定を締結しているプログラムのことである。

(4) 佐々木倫子（1999）「『日本事情』の教育方法：ビデオを用いた 3 地域意識調査から」を参考にした。

(5) 同（2）。

参考文献

高明珠（2010）「中国人留学生の視点からみる日本の留学生政策」『同志社政策科学研究』12（1），pp 1-15.

国際交流基金『2012 年度日本語教育機関調査　結果概要　抜粋』

佐々木倫子（1999）「『日本事情』の教育方法：ビデオを用いた 3 地域意識調査から」『21 世紀の『日本事情』日本語教育から文化リテラシーへ』「21 世紀の『日本事情』」編集員会編

杉村美紀（2008）「アジアにおける留学生政策と留学生移動」『アジア研究』54（4），pp 10-25.

張梅（2012）「私費留学生の進学意識と進路決定：日本語学校在籍者へのインタビュー調査から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』（52），pp 169-181.

恒松直美（2012）「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』（17），pp 51-60.

坪井健（2012）「日本の留学生リクルーティング:アジアの留学生受け入れ戦略と日本留学の魅力度」『留学交流』（12），pp 1-12

土井繭子（2014）「中国の日本語学習者に対する日本留学への意識調査：中国遼寧省大連の大学での調査」『静岡産業大学情報学部研究紀要』（16），pp 253-272.

ネウストプニーJ.V.（1991）「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育』（1），国際交流基金日本語国際センター.

船津秀樹；堀田泰司（2004）「海外留学に関する意思決定問題」『商學討究』55（1），pp.89-108.

船津秀樹（2012）「海外留学留学の動機作り：ブリッジ・プログラムの重要性」『留学交流』（14），

pp 1-11.
星野晶成（2014）「名古屋大学生の東南アジア留学に対する意識調査」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』（1），pp 33-40.
横田雅弘ほか（2009）『中国における日本と諸外国への留学生送り出し要因の比較研究～IDP 方式の将来予測～』（2008 年度明治大学新領域創成型研究）明治大学国際日本学部

中国における日本語専攻生の留学意識調査表

質問 1　今までの日本語の学習時間は（　　）年（　　）カ月

質問 2　日本語学習のきっかけは何ですか。

1. 日本語そのものへの興味	2. 日本社会や文化への興味
3. 日本へ行きたいから	4. 専攻を選ぶ際に、他の選択肢がなかった
5. 日本語関係の仕事を見つけやすいから	6. 家族や親族の勧め
7. その他（　　）	

質問 3　あなた自身、日本語の勉強に対する意欲はどの程度だと思いますか。

1. 強い	2. やや強い	3. やや弱い	4. 弱い

質問 4　大学卒業後の予定は何ですか。（複数選択可）

1.　中国における日系企業に就職する	2.　日本における企業に就職する
3.　国内の大学院進学	4.　日本の大学院進学
5.　国家公務員になる	6.　教育機関に就職する
7.　その他（　　）	

質問 5　あなたはこれまでに留学した経験がありますか。

1. 経験なし	2. 経験あり

質問 6　あなたは、海外留学をどの程度望みますか。

1.　大いに望む	2.　少し望む	3.　あまり望まない	4.　まったく望まない

以下の質問は、日本への留学希望のない人だけにお尋ねします。

質問 6-1　日本へ留学したくない理由は何ですか。

1. 海外留学に興味がないから	2. 経済的な理由
3. 語学力が不足しているから	4. 卒業が遅れるから
5. 日本留学に関する情報が不足しているから	6. 日本で生活するのは不安だから
7. 家族たちは賛成してくれないから	8 . 将来の進路に役に立たないと思うから
9.　その他　（　　）	

質問 6-2　大学間での協定を利用した交換留学制度を知っていますか。

1. 知っている	2. 聞いたことがあるが、詳しく分からない	3. 知らない

質問 6-3　交換留学制度をよく知ったとしたら、留学へ行きますか。

1.　はい	2.　いいえ

以下の質問は、日本への留学希望者だけにお尋ねします。

質問 7　留学の目的は何ですか。（複数選択可）

1.　語学力を向上させるため	2.　異文化に接したり、視野を広げたいため
3.　日本で働く、もしくは日本企業に就職するため	4.　将来の進路に役に立つため
5.　高い学位を取得するため	6.　言語以外の必要な技能や専門知識を身につけるため
7.　その他　（　　）	

質問 8　日本は留学先としての魅力は何ですか。

1. 日本の大学の教育の質の高さ　2. 将来の就職に有利になること
3. 留学費用の安さ　4. 生活上の安心感
5. 日本社会の生活様式や文化、慣習　6. 手続きの簡単さ
7. 交換留学制度の設置　8. その他（　　）

質問 9　日本へ留学しようと答えた方、どのぐらいの期間滞在したいと思いますか。

1. 半年間　2. 大学修了まで　3. 大学院修了まで　4. ずっと日本に滞在したい

質問 10　日本に留学するにあたり、不安に感じることは何ですか。

1. 日本の天候や食べ物、習慣に適応できるかどうか
2. 自分の希望する学習ができるか、また、学習の成果をあげることができるかどうか
3. 日常生活における母国の習慣（生活習慣、宗教上の習慣等）との違い
4. 病気にかかったりホームシックになったりすること
5. 経済的な困難に直面しないかどうか
6. 特に不安はない
7. その他（　　）

質問 11　これから、日本留学に際しての望むことは何ですか。

1. 大学による留学情報や交換留学制度の紹介　2. 大学によるブリッジプログラムなどへの企画
3. 教員の日本社会の異文化や慣習などの知識への紹介　4. 日本の大学や日本の教員を紹介してもらう
5. 大学や教員に相談に乗ってもらう　6. 留学費用を安くすること
7. その他（　　）

質問 12　今後本留学に際してのプラスの要因を教えてください。（複数選択可）

1. 語学力の向上　2. 日本の大学の学位取得
2. 国際的な考え方を身に付けたり、視野を広げたりすることができること　4. 異文化体験
5. その他（　　）

質問 13　今後日本留学に際してのマイナスの要因を教えてください。（複数選択可）

1. 地震や原発事故の影響　2. 政治的理由
3. 留学費用の問題　4. 周りの人たちの反対
5. 卒業が遅れること　6. その他（　　）

アンケート調査にご協力いただき、誠にありがとうございます。